月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.19

『イース セルセタの樹海』の最新情報が到着

ティオのファルコムラジオ
めんどくさいです…でもがんばります！
の舞台裏

セルセタのキャラクターが新登場！
みんな集まれ！ファルコム学園

不動のジンが強敵（とも）に出会う!?
英雄伝説 空の軌跡
リベール王国スナップショット

啄木鳥しんき
イラストメッセージ

ファルコムjdkバンドドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

Falcom FanArt Collection



コミックス第２巻もまもなく発売！

空の軌跡外伝 レーヴェ物語



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 空の軌跡
～リベール王国スナップショット～

著：はせがわみやび

第４回『思い出は色あせても』

1.

「いつも通りガラガラですね！」

店に思いっきり失礼なことを言ってから、ドロシーは奥の隅の席をひとつ陣取った。

注文を済ませると、腰のポシェットから買ったばかりの小さな結晶をテーブルに並べる。

ぜんぶで八つ。一セット分だ。

「さてっ、と……」

ひとつため息をついてから、親指と人差し指の間に挟み、その小さな結晶を天井から吊り下がっている導力灯の光にかざした。

虹色にきらめく結晶は感光クオーツと呼ばれる。たんなるクオーツではなくて、オーバルカメラで写した風景をこの中に記録することができる。

「こんな中に切り良く二百五十六枚分ですもんねぇ」

いったい、どうやって記録しているのだろう？

感光クオーツを眺めるたびに思うのだけれど、カメラマンでしかないドロシーには導力技術の理屈はさっぱりわからない。

「ん。傷は無いようです。これはオッケーっとぉ」

買うときに点検済みとはいえ念のためだ。右にある次の結晶を摘まんでは、明かりにかざして調べて左に置く。八つのクオーツを調べ終わったところで、胸元に臨時の縫い取りを

つけたウェイトレスが食事を運んできた。

「ほら。うずまきパスタだよ！　こっちは黒胡椒のスープ。冷めないうちに食べな。伸びるとまずくなっちまうからね！」

「あ、はい。どうも」

「……声小さいね、あんた。顔色も疲れてるみたいだし」

「そ、そうでしょうか。あ、ありがとうございます！」

よし、と腰に手を当てて、豊かな身体を揺らしてから、ドロシーより二十ほど年配のウェイトレスは厨房へと戻って行った。誰かを思い出すおおらかさと元気のよさだ。

「はあ……。ええと、いただきます、っと」

そう言いつつ、フォークをパスタに突き刺したところで動きを止める。

ドロシー・ハイアットは確かに疲れていた。

不安が心の内に込み上げてくる。

——果たして返していただけるんでしょうか？

思い返して憂鬱になってしまう。

うずまきパスタをフォークに巻きつけたまま、ドロシーは呆けていた。そのまま何度も皿の上でぐるぐる回し続ける。

——もったいないですよぅ。

幾枚かの風景は二度と写せないものもあるのだ。

「もったいねえな」

「はい。もったいないんです」

「だったら食えよ……」

「はあ。確かにおいしい料理を写した場合などは、思わず食べてしまいたくなるものですけど、感光クオーツは食べられませんので」

「ちげーよ！」

ぽかっと、柔らかい何かで頭をはたかれた。

「あいた。——え？」

そこでようやくドロシーは視線をあげた。

見知った男の顔が目の前にあった。丸めた新聞で肩を叩きながら、

「よう」

「ナイアル……先輩？」

「おう。どうしたよ。いつにも増してぼうっとしやがって」

「む。失礼ですよぅ。先輩、それじゃ、わたしが普段からぼうっとしてるみたいじゃないですか」

「してる」

「す、少しは否定してください！」

「事実だからな。あと、そいつもったいねえぞ」

「へ？」

ナイアルが指で示した先に視線を動かす。フォークに絡ませたままぐるぐる回し続けたパスタからは、すっかり水気が抜けて、てろんと伸びてしまっていた。

「あー……」
　口に入れてから大後悔。
「ふにゃふにゃします。おいしくないですー」
　涙が出そうだ。薄給の身のゆいいつの楽しみが食事だというのに。

2.

　ドロシーがナイアルと待ち合わせに選んだその居酒屋は《フォーゲル》という名で、工房都市ツァイスの西側地区にあった。
　ドロシーはパスタをなんとかたいらげて、冷めきったスープも飲み干した。ナイアルは、飛行船の中で夕食を済ませてしまったという。
「……なるほどな。カノーネ大尉に感光クオーツをぜんぶ取り上げられた、と」
「はい」
　色々あったのだ。詳しくはどこかでゆっくりと話すとして、当面の問題は、感光クオーツを買い直したおかげで取材費が底を突きそうなことだ。慌てて王都の本社に連絡を入れたのだが……。
「追加支給が欲しけりゃ、記事を出せとさ」
「はあ……。やっぱりですか」
　ナイアルが、ドロシーへの単なるお使いだけで街にやってきたとは思えなかった。薄々予感はしたのだけれど。
「記事……と申しましても～」
「文章は期待してねえよ。そっちは俺が書く」
「だから、クオーツは取り上げられてしまってですね」
「あのな」
　ナイアルが頬杖をつきながら、ドロシーに諭すように言ってくる。
「何も展覧会で一席を取るような写真を出せなんて言ってねぇよ。ツァイスに来てから、あちこち見て回ったんだろ？　写真は残ってなくても、気に入った風景のひとつやふたつあるだろ？」
「あ、それはもう色々」
「その、覚えてるやつの中から、適当なところにもう一度行って……」
「写真に撮ったところなら覚えてますけど、ぜんぶ」
　そう返したら、ナイアル先輩が変な顔をした。目を細めながら、ドロシーのほうに疑うような視線を投げて、
「は？　おまえ、何言ってやがるんだ？　今までいったい何枚撮ったんだよ。千とか万とかじゃきかないだろ？」
「クオーツひとつで二百五十六枚です。八つで一セットで、ええと……二〇四八枚かな。リベール通信社に入って、これが十セット目ですから、そうですね、約二万くらいでしょうか。先輩、正解！　さすがですー！」
「そりゃどうも――じゃねえよ！　それぜんぶ」
「覚えてます、けど」
「景色なんて似たり寄ったりじゃねえか、そこまでしっかり覚えてるわけ――」
「いえ」
　すこし声が強くなったので、ナイアル先輩が言葉を止めた。
「わたし、どうでもいい風景なんて撮ったことがないので」
「――っ！」
　絶句された。
　――そんなに変なことを言っただろうか？
「証明しろと言われても困っちゃいますけどねー」
　ドロシーは今までに写した二万枚近くのすべての風景を一枚残らず細部まで思い出すことができたが、それを伝える術は持たない。話して聞かせることも、絵に描いてみせることもできない。
　それができたら、カメラマンになどなっていないだろう。
「相変わらず、写真のことになるととんでもねえな……」
「そーでしょうか？」
「まあ、そのことは置いておいてだ。ツァイスの記事が欲しいんだから、こっちに来てからでいいんだよ。特集記事に使えそうな写真のネタを探しておけって言ったろ！」
「あー。そうでしたそうでした」
「忘れてたのかよ!?」
「いえいえ。ちゃんと喉元まで出かかったところに覚えておきましたとも」
「忘れてたんだな……」
「あっ、そうか。思い出しましたー」
「いい景色があったか？」
「いえ、そっちの話ではなく」
　先ほどのウェイトレスのおば――おねえさん。会話をしていて何か覚えのある感覚がしたと思ったのだ。温泉の女将さんを思い出したからだ。
「温泉？」
「はい。わたし、取材の拠点に温泉宿に泊まりまして」
「ほう？」
「ご飯もおいしくて、東方風の造りの内装も素敵でした～。ゆったりのんびりの露天風呂なんですよぅ。湯上りのフルーツ牛乳がこれまた最高なんです！」
「いいねえ。詳しく聞かせてみろよ」
　と、先輩記者に促されて、ドロシーは記憶をさらい始めた。

3.

ツァイスの南にある旅館《紅葉亭》。

そこにはとても元気のよい女将さんと風情のある温泉があった。

撮影旅行の拠点にするにはとてもよいところ。

「で、荷物を置いてからカメラを持って街道を戻ったんですけど。街道沿いには、こうピンとくるような景色がなくてですねー。平原道から外れてネタを探していたところ、実はちょっと野犬に食べられそうになりまして」

ガタッ、とナイアルが椅子から腰を浮かせて、驚いた顔になった。

「お、おまえ——」

「あ、だいじょうぶです。というか、だいじょうぶじゃなかったら、わたし、ここにいませんってば。今頃ワンちゃんのお腹の中ですー」

「お、おう。そうか。そうだよな……って、やめろよ、想像しちまうだろ」

「はあ」

「まあ、助かったんなら良かったけどな」

「偶然ってあるんですねー。通りかかったエステルちゃんたちに助けられまして」

「あの見習い遊撃士コンビにか？」

はい、と頷く。

すっかり馴染みになった遊撃士のふたり、エステルとヨシュアは、ティータという少女とともに、《紅葉亭》のポンプの修理をするためにツァイスの街からやってきたのだ。

「あいつらもここにいるのか……」

「不思議な縁ですよねー」

修理道具を持って旅館に着いたエステルたちは、女将さんから頼まれて、ドロシーを迎えに来てくれたというわけだった。

「間一髪でした」

「まあ……おまえさんがどうにかなるとかちっとも思ってはいなかったけどな」

「それにしては焦っていたようですが」

「ちげーよ。犬が腹を壊さねーか心配したんだよ！」

「むっ、失敬な。それはないですよぅ。先輩だって、常日頃から言ってるじゃないですか」

「へ……？ 俺なにか言ってたか？」

「おまえは天然だって。そこらの加工品より新鮮ってことでしょう？ おなかを壊すなんてそんな……」

「天然の意味がちげぇ……」

ナイアルが、げっそりとした顔になってため息をついた。

ドロシーは先輩記者の顔を見返しつつ——いえ、そこまで本気に呆れられると今さら冗談でしたと言いにくいのですが——旅館の女将さんのことを思い返していた。

いつもニコニコしていて、大きな声で、旅館に泊まるひとりひとりに対して、とても丁寧で思いやりあふれた応対をしてくれた。

それなのに、満足にお礼も言えずにツァイスに戻ってきてしまった。

あのときは出発してしまったエステルたちを追いかけるのに夢中だったのだ。

——心配かけてしまったんですよねぇ。

「何かお礼をしたいですねぇ……」

ドロシーのつぶやきを聞き取ったナイアルが「何がだ？」と尋ねてくる。

相変わらずだ、とドロシーは思う。

ほんとに大事なときには、このひとは聞き逃したりしないのだ。

「実はですね……」

ドロシーは旅館《紅葉亭》の女将さんについて話して聞かせる。

世話になったこと。心配をかけてしまったのに、ロクに礼も言えなかったこと。

「なるほどな」

「いちおうお詫びを言って、お礼をしようとしたんですけど……。『あんたが無事だったんだからそれで充分さ。別にいいよ』と。その言葉に甘えてしまった格好なんですけれど」

「今になってみると、もっと何かできないかって思えてきたわけだな？」

「はい」

ナイアルの言うとおりなのだった。

「じゃ、聞いてみるか」

と、椅子から腰を浮かせながらナイアルが言った。

勘定をテーブルに置きながら——珍しいことにおごってくれるらしい——どこかに行こうとする。

ドロシーは慌てて追いかける。

「ちょ、ちょっとセンパイ！」

居酒屋の扉を開けて出るナイアルに息を切らしながら追いついた。

「き、聞いてみるって？」

「その女将さんにだよ。もう一回聞いてみりゃいいだろ。お礼をしたいのですが、何か欲しいものはありませんか、ってな」

「これから旅館まで行く気ですか⁉」

「バカ。もう夜になるぞ。街道を歩いたって夜の旅は俺たち

だけじゃ無謀だ。文明の利器に頼りゃいいだろが」

「あ……」

言われて思い出した。

そういえば、あの旅館には導力利用の通信器があったはず。遊撃士協会か、中央工房あたりの通信器を借りれば連絡が付けられるのではないだろうか。そうか、その手があった。でも――。

「あの……でも、通信器って、確かミラが……」

「経費だ、経費」

「け――」

「そうなるはずだ。俺が立て替えてやるよ。まあ、やってみりゃわかる。どうせ、おまえのできるお礼なんて決まってるんだからな」

――はて、どういうことでしょう？

4.

中央工房の通信器を借りて、《紅葉亭》の女将、マオ婆さんと話ができた。

最初はお礼なんていいと断り続けたマオだったが、ドロシーの熱心さに負けたらしく。

そうだねぇ。前から思ってたんだけどさ、と前置きをしてから、ドロシーに告げた。

通話を終えてからナイアルに伝える。

「旅館に泊まってくれたお客さんに、宿泊の記念になるものをあげたいけれど、何にしたらよいか悩んでいる。何かいいものを思いついたら教えてくれ――だそうです。お礼ならそれでいいって」

ナイアルは、予想通りという顔をしながら、ドロシーに向かってにやりと笑う。

「先輩……何か思いついてます？」

「ああ。おまえ、得意だろ。そーゆーの」

さっぱりわからない。

「ヒ、ヒントください。ヒント！」

「すこしは自分の頭で考えやがれ！」

「ひーん。わたしの得意なことですかぁ？　うーんうーん。でも、わたしが少しでも得手なことって写真くらいで……写真、ですかぁ？」

「そう、それ」

「あ、わかりました！」

「そいつでいこう！」

「温泉旅館で湯煙りナイアル先輩の水着ブロマイドです！」

「ちげーよ！」

絶叫レベルで叫びながら、ぺし、と頭をはたかれた。

工房内で大声を出したものだから、まわりの技師たちから睨まれた。気まずい。

そそくさと工房から立ち去りつつ、

「冗談ですよぅ」

「おまえのは冗談に聞こえねーんだよ！」

「はあ。じゃあ、あのええと、記念写真……ですね？」

「そのあたりだろ。最近じゃ、写真をそのまま通信紙にするって商売もあるらしーぜ。表が風景とかの写真で、裏にメッセージを書けるとかいう」

ポストカードのことだ。

なるほど、とドロシーは思う。女将さんはツァイス地方の旅行者に思い出になる品を渡したいわけだから、ツァイス地方の風景写真をカードにしたら、ぴったりなのではないだろうか。

「記憶の中の思い出はいつか色あせる。けど、感光クオーツに刻まれた風景は残る」

「はあ」

「色あせない思い出を切り抜いてみせるのは、おまえ得意だろ？」

「得意、なんでしょうか？　できるかなー」

「できるかどうかはどうでもいいんだよ。やるかやらないかって話だ」

「…………やります」

ドロシーは心の中でもう選んでいた。他の選択肢はない。

ナイアルだってわかっていたのだろう。よし、と頷くと、丸めた新聞でドロシーの頭を今度は軽くぽんと叩いた。元気づけるように。

「明日から、おまえはツァイスの絶景写真を撮る。おれはその様子を記事に書く。ほれ。これで仕事になったろ。通信費の元は取れるぜ」

「先輩。その最後の台詞でイロイロ台無しですよぅ」

「俺だって、イロイロ忙しいんだよ！　さっさと今追っかけてる事件に戻りてぇんだ」

「お世話になります」

「じゃ、明日から出るぞ。で、どこ行く？」

「そうですね……。やっぱり旅館に近いところの絵がいいと思うんですけど」

明くる日。ドロシーとナイアルはトラット平原道を南へと歩いていた。

温泉宿のあるエルモ村を目指しつつ、少しでも良い風景を探すために。

だが――。

街道から撮れる風景というのは、ようするに旅人ならば誰

でも見れる風景であって、いまいちドロシーの心に響かない。
「まぁ、だからこそあのときも、ちょっと離れた森のほうまで歩いてみたんですけど」
「だめだ」
ナイアルがにべもなく首を振った。
お互いに旅人として最低限の装備と荷物を整えての道のりとはいえ、街道を外れればそこは魔獣の行き交う地なのだ。危険すぎる。ましてやドロシーは一度野犬に絡まれている。
ナイアルが慎重になるのも仕方ないだろう。
遊撃士の護衛でもいれば別だったが……。
「とはいえ……これはどうにも」
「どこが気に入らねーんだ？ いい景色だと思うがな」
トラット平原は起伏もなめらかで緑豊かな地だ。ときおり左右に森を抱く丘が見えるものの、エルモ村までの道には障害になるようなところもない。
平原のそこそこで、色鮮やかな野の花が自然の花畑を作っていた。
「風も気持ちいいし。のんびり歩くにはもってこいのところだよなぁ」
「でも、……トラット平原ならでは、って感じではないかと」
ドロシーが言うと、ナイアルは納得したとばかりに頷いた。
「なるほど。確かにどこにでもありそうな風景っちゃぁ、風景だわな」
「ですよねー」
何か、トラット平原ならではの個性が写真に欲しいのだ。
そうすれば、この地方に来た旅行者にとって得難い思い出の品となるだろう。
けれど——ツァイス地方の名物っていったい何だろう？
考えこみながら歩いていたら、どきりと心臓が跳ねた。
びっくりして驚いた理由を思い返し、直後に理解した。
声が聞こえたからだ。

キエィ！ エヤア！ トゥ！

そんな感じの叫び声がほら聞こえてくる。叫び声というか、掛け声だ。
近くの森の中からだった。
「なんだぁ？」
「先輩、行ってみましょうよ」
「お、おい！」
いちおうは止めるポーズを取ったものの、結局、ナイアルもドロシーの後をついてくる。
最後は好奇心が勝つのが、記者であり、カメラマンなのだから。

用心しつつも森に分け入り、そうして声の聞こえるほうへと歩いて行って、ドロシーは開けた草地で行われている戦いの現場に到着した。
見たことがある男が白い獣と戦っていた。

5.

おりしも日は中天にあり——。
輝く日差しが丸く開けた草地の緑を輝かせている。
男のほうは熊のように大きな体格をしていた。東方風の胴衣を羽織り、こちらに背を向けてやや腰を落として構えている。武器らしきものは持っていない。
「格闘家か……」
ぼそりとナイアルがつぶやいた。おそらくそうなのだろう。
ドロシーはこの男とすれちがったことがあるのだけれど、そのときエステルが言っていた。かなりの武術の腕があるようだ、と。
そのエステルがいた。
ヨシュアとともに、熊のような男を遠巻きにしている。向こうもドロシーたちに気づいたようで、こちらをちらりと見て、軽く手を振ってから視線を戻した。
「あっちの妙な野郎はなんだ……」
「ヒツジンですねー」
熊のような男と対峙しているのはヒツジンと呼ばれる魔獣だった。
見た目が羊とそっくりなためにそう呼ばれる。
もこもこした白い毛並みも、頭の左右に生えた曲がった角も羊と変わらない。つぶらな黒い目をしているので、黙っていれば可愛らしい生き物だった。
だが、こう見えてヒツジンは好戦的なのだ。
二本の後ろ脚で立ち、二本の腕、というかひづめを武器にして襲ってくる。
ヒツジンは、トラット平原ではありふれた魔獣であるため、ドロシーも何度か遠目で見たことがあるのだが、目の前の白いヒツジンはかなり大きいほうだ。
熊のような男に負けていない。
過去の激しい戦いを物語るように右の角が半ばほどで不自然に折れていた。
涼やかな風が吹いた。
梢がさやさやと音を立て、ふたり——男とヒツジンの間に、木の葉が一枚、はらりと舞って過ぎていった。
それが合図だったかのように両者が動いた。
一気に双方が間合いを詰める。
裂ぱくの気合とともに、男の両腕がヒツジンの身体に向

かって何度も動く。

速すぎて目で追えないほどだ。

だが、ヒツジンも負けてはいない。同じくらいの速さでひづめを繰り出している。

バシッ、バシシッ、と打撃の音が掛け声とともに空気を震わせる。

拳をひづめで防ぎ、ひづめを拳で防ぐというハイレベルの攻防だ。両者とも、何度も打撃を繰り出しているのに、わずかのところで身体に当てさせていない。

「セセセ、センパイ！」

「互角、か……」

ナイアルの言葉とともに、両者がふたたび間合いを広げた。

「お前さん、やるねぇ……」

男の低い声のつぶやきが風に乗って聞こえてくる。

ヒツジンのほうも、何かつぶやいたようだ。さすがにドロシーでは何と言ったかわからない。そもそも、言葉を話すのかわからないし。

片角のヒツジンがドロシーたちのほうをちらりと見た。

くるりと背中を向ける。

そのまま去っていった。

誰も追わない。

「ヨシュアくん、エステルちゃん、ええと、それから……熊さん！」

ナイアルとともに駆け寄りながら声をかける。

熊のような男が振り返り、ドロシーを見て言った。

「おいおい誰が熊だって……ああ、あんたか。たしか、前にもこのあたりであったな。このふたりと一緒にいたお嬢ちゃんだ」

「はい。ドロシー・ハイアットですよ～」

「ドロシー、どうしたのよこんなところで。また道に迷ったとか」

「エステルちゃん……またって……」

あのときだって撮影場所を探していただけで道に迷っていたわけではないのだが。

「ヒツジンとかいうあの魔獣、逃がしてよかったのか？」

ナイアルが尋ねて、熊のような男がにやりと笑みを浮かべて言った。

「ああ。問題ない。襲われていたわけじゃなく、稽古をつけていただけだからな」

答えを聞いて、ぽかんとナイアルが口を開けた。ドロシーだって、同じだった。稽古だって？

ドロシーたちの様子を見て、ヨシュアが苦笑しつつ提案してくる。

「まあ、こんなところで立ち話もなんですから、場所を移しませんか？」

ヨシュアくんってば、気配り上手は変わってないな、とドロシーは場違いな感想を持ってしまった。

6.

街道から少しはずれた木陰でドロシーたちは少し遅い昼食を取ることになった。

エステルたちも食事はまだだったようで、釣った魚を焼き、清水を沸かして簡単なスープを作る。

ドロシーたちは街を出たばかりだったのでお弁当を持っていた。それをエステルたちと分け合う。

「はい。にがトマトサンドをおひとつどうぞー」

「これ結構苦いのよねー」

「でも栄養たっぷり……だそうですよぅ」

「うー。苦いよう！」

「無理しなくてもいいんじゃない？　エステルが好きな食べ物って、オムレツとかハンバーグとか、基本的に子ども向けのものばかりだから、こういう苦みの効いた大人向けの料理は合わないと思うよ」

「……む。何よ、あたしが大人の味を理解できないっての!?　に、にがトマトのひとつやふたつ、このエステルさんにかかればイチコロよ！　えいっ！」

がぶりと大きく噛みついて、涙をぽろぽろ流すのだった。

「……だから無理しなくていいって言ったのに……」

「うー」

――どっちが年上なのやら……。

ドロシーはこっそり微笑んでしまう。

涙目を隠しながら無理やり食べるエステルと呆れ顔のヨシュアに、相変わらずだなと懐かしいものを感じてしまう。

それでも、ふたりとも最初に会った頃と少し雰囲気が違ってきている気がした。仲の良い姉弟だとは思っていたが、なんとなくそれ以上のつながりのようなものを感じる……。

その間に、ナイアルと熊男も互いに挨拶をしていたようだ。

「ジン・ヴァセック……って、あの共和国を代表する遊撃士、《不動》のジンじゃねーか!!」

「有名かどうかはわからんが、遊撃士ではあるな」

「熊さんじゃなかったんですねー」

そりゃそうだろうと、今度はドロシーがナイアルに呆れられた。

それからお互いに近況を報告しあった。

明るく振る舞ってはいるものの、エステルとヨシュアが立て続けに事件に巻き込まれている最中なことをドロシーは

知った。それもどうやら、オーブメント絡みの事件らしい。詳しいことは話してくれなかったが。

ナイアルは関心を示したが、エステルたちの口が堅いことを見てとると諦めたようだ。

もとより無理強いするような性格でもない。

話題は先ほどの魔獣との戦いになった。

「旅の途中だったが噂の御仁と手合せしたくなってな。無理を言って寄ってもらった」

「街道沿いの旅人の間で有名になってるんだって。ツァイスのホテルで聞いたんだけどね」

エステルが話の補足をしてくれる。

「はあ。格闘家のヒツジンさんですかぁ……」

ようするに、こういうことらしかった。

トラット平原のヒツジンの中に格闘好きな一族がいるらしい。そしてその一族の中で、あの片角のヒツジンは、他の仲間たちの倍ほども大きく、力ももっとも強いという。

「俺も武術家のはしくれだからな。一番強いと聞いて居ても立ってもいられなくなった。なんとしても手合せしてみたくなった」

「強い奴に会いたくて、こんな森の中にまで来てたってのか？」

「ああ。おかしいか？」

「……おかしいっちゃ、端から端までおかしい気もするが、まあ、そもそも格闘家なんてのはおかしなやつらばっかりだからなぁ」

「ちょっと待ちなさいよナイアル！ それはゼムリア中の武術家に対する挑戦と受け取るわよ！」

「エステル、少し落ち着いて……」

「ヨシュアは黙ってなさい！ ナイアルってば、あたしの事もおかしいって言ってるんだから！」

「……うんまぁ」

「おかしいだろ」

「おかしいですねー」

「まあ、お嬢ちゃんがふつうじゃないことは俺も認めざるをえんな」

「あんですってぇぇぇーーーー！」

激昂するエステルをヨシュアがなだめる。それをしり目に、ナイアルが重ねてジンに尋ねたところによれば、確かにあのヒツジンは極めて強かったらしい。

おそらくはそれなりの激しい稽古を重ねているはずだと言った。

「あやつは武の道を志すものと同じ瞳をしていた。肩慣らしのつもりだったがな。つい本気になっちまった。拳を打ち合わせた今、あいつはもう俺の強敵(とも)だ」

きっぱりとジンが言って、肉体言語が苦手なナイアルが「そ、そうか」と若干ひきつりながら頷いていた。

格闘家理論は種族の差まで飛び越えてしまうらしい。

――にしても、ヒツジンと友情を結んでしまうとは。このジンという男の人はただものではない気がする。

「あ」

ドロシーは思わず声に出してしまった。

――思いついた！

ヒツジンといえば、トラット平原やリッター街道で多く見かける魔獣だ。

つまり、この地方の名物と言っていい。

確かに好戦的でおっかない魔獣として知られるものの、見た目だけは愛らしく可愛いことでも有名だった。そして、あのヒツジンは……、このジンさんのトモダチだという。

――こ、これは使えるのではないでしょうか！

「あ、あのぉ～。熊のジンさん」

「熊じゃないが、なんだい？ お嬢ちゃん」

「じゃあ、熊じゃないジンさん。あのですねー」

「おう」

あのヒツジンが本当にジンの言うとおり、たんなる魔獣ではなく、近寄っても平気なヒツジンであるならば……。

もしかして、世にも珍しいヒツジンの全身写真が撮れるのではないか。

ドロシーはそう思ったのだ。

ヒツジンの全身ブロマイド、ツァイスの風景つき。それならば充分にツァイス地方ならではの思い出と言えるかも……。

「ちょっとしたお願いがあるのですが、聞いていただけないでしょうか……」

いい案に思えたのだ。そのときは。

7.

けれども――。

理由を話してジンの協力を取りつけることには成功したものの……。

肝心のヒツジンに出会えなくては計画も絵に描いた餅だった。

西空に傾きつつあるお日様を見てジンが「では、明日だな」と言った。

「はい……」

「済まねえな、こいつのわがままにつきあってもらって」

「なに。人の助けになるのが遊撃士の役目だ」

「ごめんね。あたしたちも用事がまだ終わってなくて」

「いいんだよ、エステルちゃん。あたしこそ、無理言ってごめんなさいだよー」
トラット平原道の分かれ道に立って、ドロシーたちは互いに頭を下げあった。
昼食後に、ドロシーたちはあの片角のヒツジンを探して街道沿いの森をうろうろと歩き回ったのだが、出会うのはふつうのヒツジンばかりだった。
ふつうのヒツジンは写真を撮らせてくれるどころではない。
血気盛んで問答無用に襲い掛かってくる。
幸い、こちらには遊撃士が三人もいたから、ケガのひとつもすることもなく撃退できたものの、ドロシーの望むような写真は撮れずじまい。
時間がばかりが過ぎ。そしてエステルたちとて、そこまで暇ではない。
さすがにこれ以上はつき合わせるのも悪くて……。
「俺だけちょぃと抜けて、明日もここまで来る。まあ、夜には戻って合流するってことでいいか？　エステル、ヨシュア」
ジンだけは、そう言って、明日、もういちどドロシーたちにつき合ってくれると約束してくれたのだ。
「僕たちもお手伝いをしたいところなんですが……」
「いや、その時間があったら、お前さんたちはツァイスに戻っていたほうがいい。だろ？」
「うーん、それはそうだけど……」
「エステルちゃん、そうしてくれていいよ」
「そうそう。そこまで甘えられねーからな。ほんとは俺たちだけで済ませなきゃいけないところだ」
ナイアルもそう言った。もっともだ。
それにしてもつき合ってくれるというジンさんにはすごく感謝してしまう。
――いい人だなぁ。
「あの、あまりたいしたお礼できそうもないですけどぉ」
「なに気にするな。俺もあいつとはまだまだやりあってみたいしな」
「ジンさん、強い相手が大好きなのよねー。男の子ってみんなそうなのかな？」
言ったエステルだったが、ふと、隣のヨシュアを見て、
「そうでもないか」
「……それは喜んでいいのか、男としては悲しむべきところなのか迷うところだね」
「ヨシュアらしいって言ってるんだってば！」
「……まあいいけど」
別れる直前にも相変わらずのやりとりだ。思わず心がほっこりしてしまう。

「じゃあ、あの……ジンさん、明日もよろしくお願いします」
ドロシーは最後にもういちどだけ頭を下げる。
「おう。任せておけ」
分かれてからエステルたちは東に向かって歩いて行った。ヴォルフ砦のほうだ。どんな用事があるのかまでは聞いていない。
ドロシーとナイアルは南へ。
今夜は《紅葉亭》に泊まることになっている。急げば日が暮れる前に到着できる。
黄金色に染まりつつある平原道をドロシーたちは進んだ。
真っ赤なお日様が丘の向こうにゆっくりと降りてゆく。
昼の暑さは和らぎ、黄昏時の爽やかな風が草を寝かし、髪を揺らして通り過ぎてゆく。風の流れに合わせて動いてゆく草波の縞模様がきれいだった。
エルモ村が見えてきて、《紅葉亭》に着いた。
わずか数日前に来たばかりだというのに何故か懐かしい。
入口をくぐると、マオ婆さんが大喜びで迎えてくれた。
宿泊手続きをしながら話す。
「あの……、昨日のお電話で言っていたお礼ですけれど」
「おや。そんなに無理しなくていいんだよ。思いつかなかったら、そのまま忘れておくれ。なあに、思い出の品なんてなくたって、この旅館に泊まってくれたひとたちが『ああ、いい湯だった』って言ってくれたら、あたしゃそれで充分だよ！」
「あ、いえ。その……思いついたのは思いついたんです、けど」
写真を提供するから、ポストカードにしてはどうか、と伝える。
マオ婆さんは驚いた顔をしてから、にっこりとほほ笑んだ。
「そりゃあいい案だね。あんたの撮った写真、見てみたいと思ってたんだ」
「今日はまだ撮れてないんですけどぉ」
「そんな顔しないでいいよ。のんびりやってくれたらいいさ。ほら、温泉にでも入って温まっていっておくれ。ここは疲れを癒すところだからね！」
おっきな声で言った。
「じゃ、ひと風呂、浴びさせてもらうかな」
ナイアルが遠慮なく言った。
ふたりして荷物を部屋に預けてから温泉に向かう。長い廊下は、東方風にすべて木の板でできていて、足の裏に心地よい。心が落ち着くっていうのかな。
「あ、ナイアル先輩」
「ん？　なんだよ」
「あの……奥に露天風呂があるんですけれど」

「おう。言ってたな。楽しみだぜ」

「どちらが先に入るか決めましょう。さあ、勝負です！」

　右手を前に出して、拳を見せる。手で、石と紙とハサミを作って、勝ち負けを決める子どもから大人までできる公平な勝負だ。

「ちょ、ちょっと待て、おい！　なんで勝負だよ！」

「そうしないと一緒に入ることになります」

「………へ？」

「ここの露天、混浴なんですよー。いえ、先輩と後輩と言えば家族も同然。気にしないといえば気にしないのではありますが、いちおう先輩を先にするのが礼儀という気もしますし。とまあ、ごちゃごちゃ考えるよりは、さあ、勝負！」

　ドロシーの言葉がナイアルの耳にようやく届いたところで、ものすごい勢いでナイアルの顔が明後日のほうを向いた。

「さ、先に入りゃいいだろ、先に！」

「いいんですか？」

「好きにしろ！」

　怒った声で言われて、ドロシーは首を傾げた。はて、何か怒られるようなことをしたでしょうか、と。

　だが、鼻をくすぐる硫黄の匂いに気づくと、浮かんだ疑問も文字通りに雲散霧消してしまった。

　温泉だ！

　そして、湯上りはフルーツ牛乳だ！

「では、センパイ、遠慮なく〜」

「お、おう」

　まだあっちのほうを向いているナイアルを残して、ドロシーは東方風の布のカーテンをくぐって脱衣所に入る。幸い、他の客は来ていない。ということは、今ならば露天のほうも貸切ということだ。

「これはらっきーですよ〜」

　あっという間に衣服を脱ぐと、外へと続く扉をくぐる。

　外気にさらされて、身体がぶるっと震える。明かりがあるから足下は辛うじて見えるものの、空はもう真っ黒だった。

　明るい星が見えている。

　洗い場でざっと身体を流してから露天風呂に飛び込む。

　飛び散る湯が周りに生えた草を濡らした。

　じん、と湯の熱さに肌がしびれたようになる。それも一瞬のこと。すぐに身体全体が緩んでくる。

「はあああああ」

　思わず長く息をついていた。

「女神さま。われらに温泉を与えてくださいましてありがとうございますぅ」

　思わずお祈りまでしてしまう。

　肩までつかって、一から数えて百まで。

　身体の芯まであったまるべく数を数えて、九十八まできたところで。

　ドロシーの耳がわずかな音を捉えた。

　がさがさ、と葉擦れの音が聞こえた。

　振り返る。

　闇に目をこらして、その奥を見透かそうとした。

「だ、だれ……か、そこにいますかあ？」

　声をかけてみる。

　何も返ってこなかった。その代り……。

「これ……血の匂い？」

　ぞくりと肌が粟立つ。いったい、これは……。

「もーし。誰かいるんですか。あの、応えてくれないと、人を呼んじゃいますよぅ」

　洗い布を身体に巻きつけ、そう言った。

　何も返ってこない。

　血の匂いも消えなかった。

　かすかに呻き声のようなものが聞こえてきて、ドロシーは決意する。

　——ちょっとだけ、様子を……。

　湯船からあがり、音のしたほう、宿の外とを隔てる木立のほうへと歩いてゆき。

　ドロシーはそこに倒れている人影を見つけた。

　いや——ちがう。

　人と良く似た姿形をしているが人ではない。

　かすかに漏れてくる明かりの中、その者の姿が辛うじて見て取れる。

　全身がもこもこした白い毛で覆われていた。

　頭の両側に丸まった角。片方は半ばで折れていた。

「こ、このかたは……！」

　身体の下から地面へと黒い液体が広がっている。

　——血だ！

　倒れていたのは、全身に大怪我を負った格闘家ヒツジンだったのだ！

（続く）


その金色の剣…
やはりあの時の赤い隊長か
ずいぶん久しぶりじゃねぇか
空の軌跡 外伝
レーヴェ物語
第十四話
脚本 田沢大典
作画 楽時たらひ


FB ファルコムBOOKS
英雄伝説 零の軌跡
四つの運命
著者：田沢大典 イラスト：松竜
特務支援課はここから始まった!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ「英雄伝説 零の軌跡」から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


…ランクC《重剣》アガット・クロスナー
いや クーデターの事件の後 Bに昇格したようだな
ヘッ…
さすがは元情報部だ
ザッ
…今度ばかりは 逮捕だの 悠長な事を 言うつもりはねぇ
その澄ました ツラごと 八つ裂きに してやるよ…!
威勢の いいことだ
フッ
だが あの程度の被害 派手という ほどではあるまい
10年前 お前が見た 光景に比べればな
!!!
ザッ
この国の 遊撃士の経歴は 一通り 調べさせて もらった
やはりお前は どこか俺と 似ているようだ
…
似てるだと?


何も
知らねぇ野郎が
適当な事を
抜かすなぁぁぁッッ
!!!


ツッ
ら
オラ
うら
うらっ
オラァ!!


似たところもあるが
俺とお前は決定的に違っている
それは剣を振るう理由だ
…？
俺が剣を振るうのは人を捨て修羅となるがため
しかしお前は
己の空虚を充たすがために振るっている
……!!


重き鉄塊を振るうことで哀しき空虚を激情で充たす…
だがそれは欺瞞に過ぎない
怒りで心震わす間は哀しさから逃れられるからだ
……
…めろ
そして欺瞞を持つ者が前に進むことはありえない
《理》に至ることはおろか《修羅》に堕ちることもない
今のままではお前はどこまでも半端なままだ
やめろ


黙りやがれえええッ
ら
あ
あぁぁあ
この男は


かつての俺だ
村が焼かれ
カリンが死に
ヨシュアの心が壊れ
全てを憎み
恨み
ただ虚しく叫んでいた
あの頃の俺だ


なんて
無様だ……


せめてもの情けだ
そろそろ終わらせてやる
クッ…!!


——消えるがいい


あの頃の
力無き俺よ


!
…ッ
ザ…
ま
待ちやがれ
まだ…終わっちゃいねぇぞ…
…この期に及んでなお砕けた鉄塊に縋るとは
チキ…
いいだろう
至らぬ身のまま果てるがいい


だめーーーーっっ!!
ダ
た


…チビスケ
ティータ!
…遊撃士たちか
留めろ
きゃあ
あうぅ…
こ
来ないで下さいっ
あ
あう
ば
馬鹿野郎…
そんな物が通用するかっ…
ひっ…
女子供を手にかけるのは趣味ではないが——
——必要とあらば
斬る
…!!


ど
どきませんっ…
わたし…アガットさんに助けてもらってばかりだから
こういう時くらいしかお礼できない…からっ…
それに
えっと…
ううん…
違う

ぶっきらぼうで…フキゲンな顔ばっかりして…
いっつも私のことチビスケって子供扱いするけど…
本当はとっても優しくて…
いつも
見守ってくれていて…
大好きで
大切な人だから

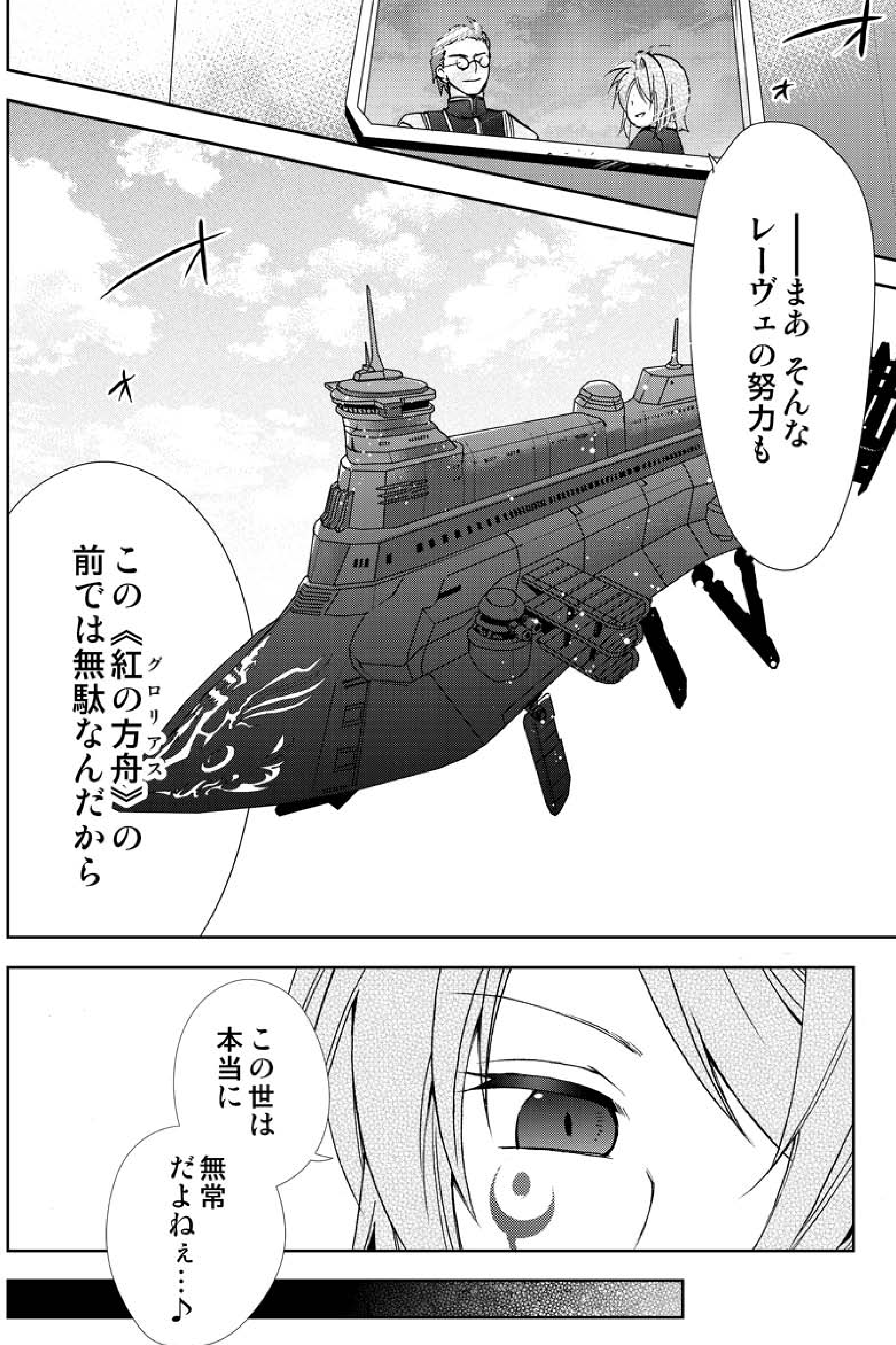

だから私
ゼッタイに
どきませんっ!!


——健気(けなげ)なことだ
邪魔も入ったようだし今日はこれで退いてやろう
え…
あ…!!
主砲と左舷副砲竜に照準を固定せよ!
イエッサー!


モッ モルガン将軍…!
待ちやがれッ…
あ
——忘れるな アガット・クロスナー
欺瞞を抱えている限りお前は何者にもなれない


大切なものを守ることも な
……!!
ダ
ダ
ダ
…
伝説の古代竜にそのような攻撃が効くものか
ザッ
行くぞ《古竜》レグナート
……
……


レーヴェがボースマーケットに向かった理由知ってる？
教授
エステル・ブライト達に姿を見せることで竜の元へ誘導する為…だそうだね
必要以上に犠牲を出さないように だって
レーヴェは優しいよねぇ


――まあ そんなレーヴェの努力も
この《紅の方舟(グロリアス)》の前では無駄なんだから
この世は本当に無常だよねぇ…♪








……
アガットさん


あのおにーさん…寂しそうな目をしてました…
……
おい将軍
ハーメルってのは国境を越えたところにある帝国側の村のことだよな?
…その名を知っているか
戦争前はラヴェンヌ村とたまに交流があったはずだ
今じゃまったく途絶えちまってるらしいが…
……
…その事についてはわしの口から言うことはできん
国家間の問題に絡むのでな
なにッ…!?
…
ただこれだけは言える
もしもわしの想像が当たっているのであれば
あのレーヴェという男…



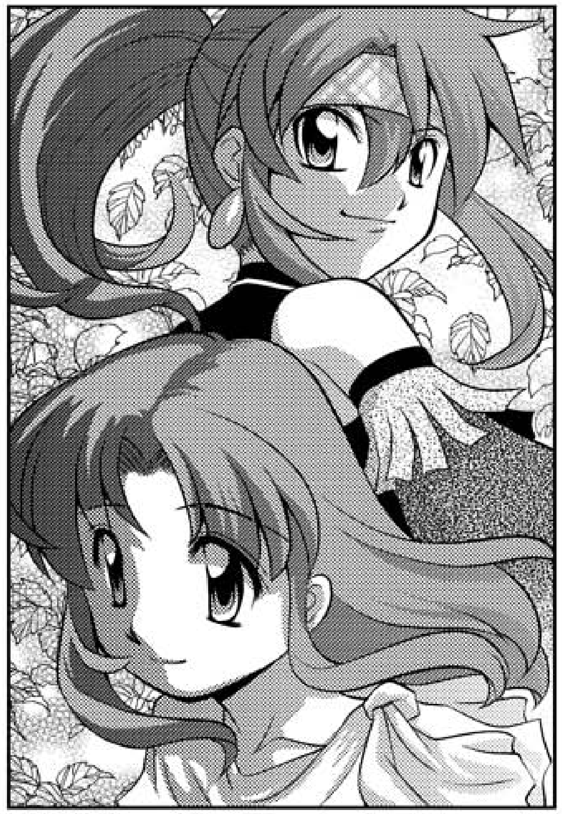
FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
『空の軌跡』が始まる――
もうひとつの
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円（税込）
ISBN:978-489610-224-6
「英雄伝説 空の軌跡」の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの「空の軌跡」の物語が始まる！　©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp


――よほどの地獄を見たに違いない



「レーヴェ物語②」
9月23日発売!!
②巻を読む前に…
登場人物をおさらいしよう!!
カリン・アストレイ
レオンハルトの幼馴染でヨシュアの姉。《ハーメルの悲劇》に巻き込まれ、ヨシュアをかばい命を落とす。かけがえのない彼女の死が、レオンハルトとヨシュアの運命を大きく動かすことになる。
レオンハルト
エレボニア帝国のハーメル村で、いずれは遊撃士の道へ進むことを志していた青年。だが、幼馴染のカリンを《ハーメルの悲劇》で失ったことから、結社《身喰らう蛇》へと身を投じ、修羅の道へと踏み出してゆく。愛称は「レーヴェ」。
ヨシュア・アストレイ
姉のカリンと、幼馴染のレオンハルトが大好きな明るい少年だったが、カリンの死により心を閉ざしてしまう。《身喰らう蛇》で暗殺者として活動した後、ブライト家に養子に入り徐々に心を取り戻してゆく。
ヨシュアをおねがい
レン
可愛らしい少女の姿の中に、無垢な殺意を秘めた様子から《殲滅天使》と呼ばれる《執行者》。レオンハルトとヨシュアにはなついている。
ワイスマン
《身喰らう蛇》の7人の《使徒》のひとり。《福音計画》のために様々な陰謀を巡らし、《執行者》を使って実行に移している。
飼い主に伝えるがいい
この坊主の身柄は
俺が預からせてもらう
君の愛する人はこの都市のように
人間の弱さに殺されたんだ
カンパネルラ
《身喰らう蛇》の執行者 No.0。その正体のほとんどが謎に包まれている。ワイスマンによる《福音計画》を見届ける役目を帯びているというが……
アリアンロード
《鋼の聖女》の異名を持つ《使徒》第七柱。レオンハルトの才能を買っており、ケルンバイターを持つに足る人物と《盟主》に進言する。
アラン・リシャール
リベール王国軍に所属する軍人。かなりの切れ者として知られる。だが、その愛国心の強さを利用され、結社に操られることになる。
カノーネ・アマルティア
リシャールの部下。リシャールに心酔しており、同時にどこの馬の骨ともしれないロランス（レオンハルト）を鼻白んでいる。
好評発売中の「レーヴェ物語①」を読んで
9月23日を待て!

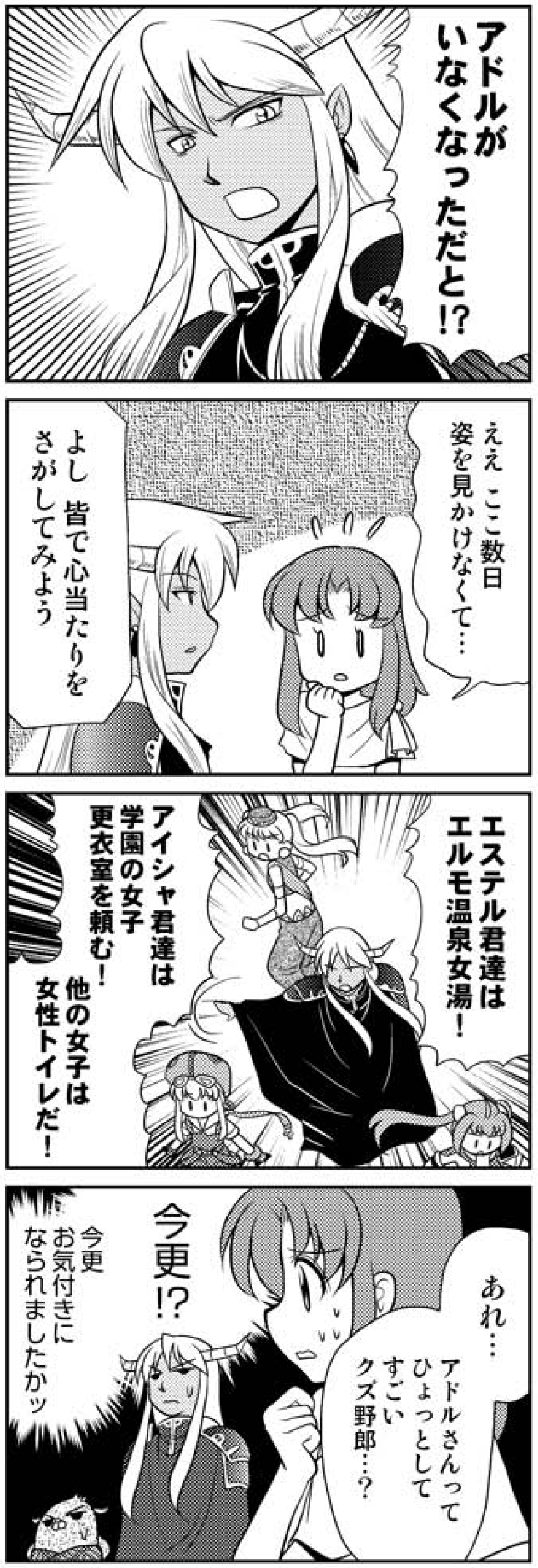

啄木鳥しんき
ファルコム大好き!
『イースⅣ The Dawn of Ys』PC Engine版。
とある中ボスの戦闘ボイス『ぶっ殺してやる〜!!!』が強烈すぎて…(笑)。
これは、ふたつあるイース4のうちの、ハドソンさんから出た方ですが、どちらも
ファルコムさんが開発したものではないそうで…いよいよ発売される
自社版イース4『イース セルセタの樹海』が楽しみです。超楽しみ!
先のボイスも、発表された声優さんが同じだったので……また聴けるのかな(笑)。



みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

冒険家の行方



日常の風景



人間の絆



本物のニオイ



本物の味



肉食系村娘



更なる本物を求めて



冒険家・その真実



冒険家・その食卓



魔物メンタル



チャッペル魔法



閃く冒険者



許される冒険者



彼にこれから起こる事



さらば冒険家



※イースvs空の軌跡で身につけた技

人生半キャラずらし



jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

Falcom SPECIAL BOX'93



岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤裕央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

皆様こんにちは！　jdkBANDドラマーのオカジです。いやあ、本当に暑い日が続きますね～。個人的にこの夏は、迫り来る締め切りやらなんやらに追われ続けていて、基本的には自宅での仕事とスタジオの往復の引き篭もり生活なので、夏らしい夏は感じられぬまま、夏が終わっていきそうです……。くそう……。まともにゲームする時間もありゃしない。せっかく発売した那由多の軌跡も開封すらできていない始末……！　早くゲームしたーいっ!!!

さて、そんなわけで心の叫びを高らかに書き殴ったわけですが、僕にとって今年一番の夏らしいイベントといえば、やはり東京日本橋三井ホールで開催されたjdkBANDのライブでした。セットリスト、なかなかおもしろかったでしょ!?　まさか2012年という時代に先輩jdkBANDが演奏していたスタートレーダーのアレンジ曲「Go Fight」を演奏しちゃったり、アンコールでアドルのテーマ→翼を持った少年→セルセタの樹海→First Step Towards Warsという Ys ファン垂涎なメドレーを演奏してみたり……。僕としても演奏していて鳥肌立ちっぱなしの楽しいライブでした。

今回、メドレーの中で演奏した「セルセタの樹海」は、1993年にSUPER CD-ROM2専用ソフト（SFCでも出てますけど……その辺りは書くと長くなるので割愛！）として発売された「YsⅣ」の楽曲なわけなのですが、当時SUPER CD-ROM2を持っていなかった僕は、実はこの作品をプレイできていないのです。それでもこの楽曲の事は当時から大好きで、いつか演奏してみたい曲のひとつでした……ハイ、ここで大きな矛盾が生じております。なぜ僕は当時ゲームを持ってもいなかったのにこの「セルセタの樹海」という楽曲を知っていたのか？　……それは何を隠そう、僕はこのアルバムを



持っていたからなのです！　ジャン！「Falcom SPECIAL BOX '93」

この豪華4枚組ボックス仕様のアルバム、内容を解説すると、DISK1は「ロードモナーク／アドバンスドロードモナーク」、DISK2は「ブランディッシュ」、DISK3は「ぽっぷるメイル」のそれぞれのオリジナルFM音源のサウンドトラック、そしてDISK4はアレンジアルバム「PRE RELEASE」。



僕はこのDISK4が欲しくて、この4枚組を購入したと言っても過言ではありません。何と言ってもこのDISK4は当時発売直前だった「YsⅣ」、「風の伝説ザナドゥ」、「ブランディッシュ2」のスペシャルアレンジアルバムだったのです。ファルコムの新作タイトル三作品の楽曲が一早く同時に聴けるとあって、そりゃあもう6980円しても小遣い貯めて買いましたよ、ええ。……で、このDISK4「PRE RELEASE」の一曲目が「セルセタの樹海」だったというわけ……。最初聴いた時は本当にかっこよくて泣きそうになったもんですよ……（遠い目）

さてさて、そんなわけで最近のjdkBANDではこういった過去の名曲も沢山演奏しているので、軌跡シリーズから入った新しいファルコムファンの方も、ライブで気に入った楽曲があれば、遡って聴いてみたり、ゲームに興味を持ってくれたらうれしいな～なんて思っています。ライブをきっかけにファルコム30年の歴史を掘り下げてみるのも一興かと！

……俺ももっと掘り下げたい！　研究したい！　だからゲームをやる時間を……（以下略）

それではまた次回お会いしましょう！　来月はゲームやるぞっ!!!!

ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで世界50ヶ国に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)
iTunes配信中のコラム関連アルバム情報
[Falcom SPECIAL BOX'93]
価格：6,000円
収録曲数：88曲

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

Vitaで冒険に出かけよう!

デザスキン『イース セルセタの樹海』for PS Vita

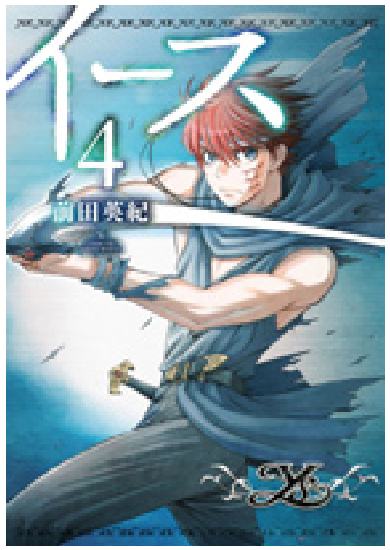


PSVita用スクリーン保護シート、デザスキンに『イース セルセタの樹海』イラストが登場！　はがし跡が残らない特殊な加工がされたシートは全部で５種類。シートと連動した壁紙も公式ＨＰで配信予定。お気に入りのキャラクターでPSVitaを飾ろう。９月２７日発売。（http://dezaegg.com/products/detail.php?product_id=185&main=1）

冒険はいよいよクライマックスへ!

イースⅣ

前田英紀が描く『イース』のコミカライズ第４巻。ロダの樹へとやってきた冒険家・アドル一行は女神レアからの指令を受け、神をも殺すことができるという聖剣シルバーソードを探す。しかし、そこで待ち受けていた死霊の大群と、強大な力を持つ聖剣の守護者の前にアドルたちは……!?　９月７日、ASAHIコミックスより発売。777円。（税込）



キュートな殲滅天使が舞い降りる！

ねんどろいど レン





大人気フィギュアシリーズ「ねんどろいど」に『英雄伝説 空の軌跡』から《殲滅天使》の異名を持つイタズラ好きな少女・レンが登場。自由に取替えができる表情パーツや武器となる大鎌、ぬいぐるみなどの付属オプションパーツも盛りだくさん。発売中の「ねんどろいどエステル・ブライト」と組み合わせるのも楽しみだ。１１月発売予定。3500円。（税込）

あの名バトルの数々が甦る!

ふぁるこむボスざんまい

コミックマーケット82で先行販売され、絶大な人気を誇ったファルコムjdkバンドの新作アルバムがついにファルコム通販でも販売決定！　『英雄伝説 白き魔女』や『ソーサリアン』など、歴代のファルコム作品に登場したボス戦で使用された楽曲をアレンジしたノンストップのボスラッシュはファンにはたまらないラインナップだ。９月上旬発売。2625円。（税込）





2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第42回-第43回　斎賀みつき（『零の軌跡 Evolution』ヨシュア・ブライト役）

42回、43回は、記念すべき第１回のゲスト、ヨシュア・ブライト役の斎賀みつきさんが約１年ぶりに再登場。初回放送時は初のラジオパーソナリティということでガチガチに緊張していた小寺さんだったが、１年という時を経て成長し、ヨシュア（斎賀さん？）への熱い愛（!?）を大暴走させた回となった。「出発！特務しれん課」では、７月に日本橋三井ホールで行われたjdkバンドライブ終了後のファンからのメッセージが届けられた。

▶第42回-第43回の舞台裏◀

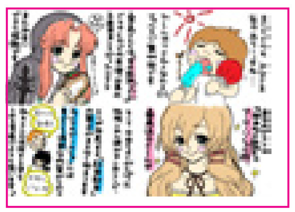
終始、斎賀さんに熱視線を送っていた小寺さん。だが、ちょうど小寺さんが収録前にカレーを食べているときに、斎賀さんが到着してしまい、大慌てする一幕があった。暴走気味の小寺さんに対し、終始笑顔でお話していた斎賀さん、いい人すぎます……。

第44回-第45回　桑島法子（『那由多の軌跡』アーサ・ハーシェル役）

44回、45回のゲストは、初の『那由多の軌跡』からのゲストとなる、アーサ・ハーシェル役の桑島法子さん。パーソナリティの水橋さんは『那由多』でも主人公のナユタを演じており、アーサはその姉ということで、いつもの『零えぼ』トークとはひと味違う話題で盛り上がった回となった。また、桑島さんは『空の軌跡』でも食いしん坊のシスター・リースを演じていたため、「ティオのつぶやき」では、リースのつぶやきも数多く披露された。

▶第44回-第45回の舞台裏◀

「出発！特務しれん課」では、ファルコム作品にちなんだ怪談話が繰り広げられたが、怖いものが苦手な小寺さんがマジ泣きをしてしまう一幕が。さらには収録後に異音が聞こえたということで、急きょ、お塩を買って、お浄めをすることとなったのだった……。







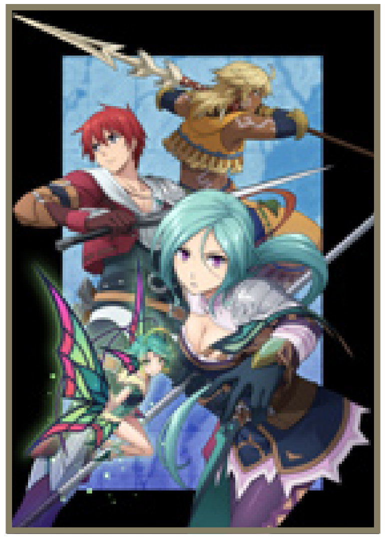
今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

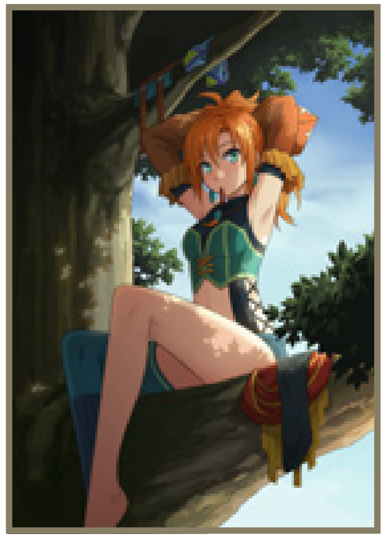
25周年メモリアルもスタート！『イース　セルセタの樹海』の最新情報が到着！

発売まであと1か月！　店舗特典のイラストを大公開！

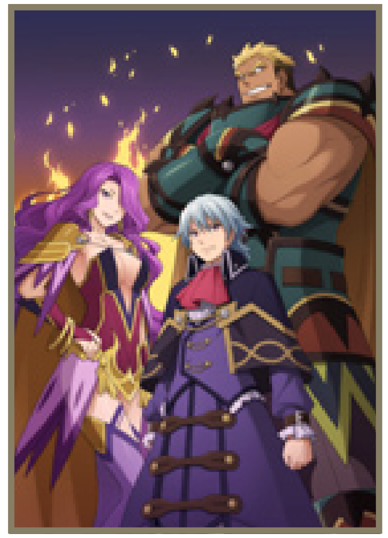
『イース』25周年記念作品『イース　セルセタの樹海』の発売を9月27日に控え、各店舗の特典イラストが公開された。今回は、その美麗イラストを大公開！



いまじん
描き下ろし図書カード



古本市場
描き下ろしクリアファイル



WonderGOO
描き下ろしクリアファイル

店舗特典はまだまだあるぞ！詳しくは公式ホームページをチェック！



ソフマップ
描き下ろしテレフォンカード
※記念パックのみ



ゲオ
描き下ろしクリアファイル
※ゲーム取り扱い店舗のみ

■製品情報

■タイトル：
イース セルセタの樹海
■英題：
Ys -Foliage Ocean in CELCETA-
■発売日：
2012年9月27日(木)
■ジャンル：
アクションRPG
■対応機種：
PlayStation®Vita専用
■プレイ人数：
1人
■税込価格：
通常版：7,140円(税込)
イース生誕25周年記念パック：
8,925円(税込)
■CEROレーティング：
B

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



片川香恵

「英伝」シリーズの中で最も好きな作品です。優しい雰囲気の物語に引き込まれ、本をめくるような感覚でゲームを進めました。主人公が出生の秘密があるわけでもない、村の少年少女という所もグッときます。

『英雄伝説㊎ 白き魔女』（1994）

「英雄伝説」シリーズ第２期「ガガーブトリロジー」の１作目にあたる作品。ティラスイールと呼ばれる大陸で、成人の儀式である巡礼の旅へと出発したジュリオとクリスが白き魔女の軌跡を辿っていく。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

那由多の軌跡 発売記念!



❶『那由多の軌跡』アーサ役 水橋かおりさん サイン色紙
日本ファルコム最新作『那由多の軌跡』の主人公・ナユタを見守る優しい姉、アーサ役の声優・桑島法子さんの直筆サイン色紙。

❷『那由多の軌跡』クレハ役 竹達彩奈さん サイン色紙
『那由多の軌跡』発売記念として今回はクレハ役を演じた竹達彩奈さんの直筆サイン色紙も大放出！　幼馴染とお姉ちゃん、どちらを選ぶ!?



③ 1名様

❸みっしぃサンバイザー
コミックマーケット82のファルコムブースにて配布されたファン必見のアイテム。これを逃すともう手に入らないかも！（みっしぃのぬいぐるみは付属ではありません）

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

- 下記のメールアドレスをご記入ください。
- お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
- 右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
- ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
- 希望するプレゼントの番号をご記入ください。

宛先：
件名：vol.19プレゼント係
○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

●「vol.19プレゼント係」とご記入ください。

【記事一覧】
1：『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』
2：『みんな集まれ！ファルコム学園』
3：英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット
4：啄木鳥しんきのファルコム大好き！
5：jdkバンドドラマー・オカジの人生半キャラずらし
6：ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
7：FalcomFanArt Collection
8：ファルコムニュース

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り 9月24日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.19

発行人　田中一寿

発行協力　日本ファルコム株式会社

編集　小渕智幸
大場恵美子

デザイン・DTP　さとうだいち

表紙ロゴデザイン　荻窪裕司（ビーニーズ）

発行　株式会社フィールドワイ
〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F
TEL 03-5282-2211（代表）
http://www.field-y.co.jp/

制作・販売協力　シナノ印刷株式会社